

Title	古き外人の観たる日本國民性, 朝鮮役, 上卷, 蘇峰學人著
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎(Tanaka, Suiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.345- 346
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0345

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東西新史乘

古き外人 の觀たる 日本國民性

巴里に遊んだ程の人はこの書の口繪なるセイメ河岸の古本屋の寫眞を見て感興を起さぬものは無からう、更に『余が往年巴里に在留中時々セイメ河畔の古本屋をあるり人には兎に角余には珍らしと思ふ古本を買ひ取るを樂しみとせしが此の原書も即ちその時に得たる古本である』と書き出してある今は古人となつた原敬氏の序文を読む時は一層感慨に堪へぬものがあるであらう。蓋し『此の書に掲ぐる日本の國情批判は能く日本人の國民性を是非品騰し日本人の絶對に平和を愛好する國民なることを述べたものである』から原氏が喜でこの書に序文を寄せられたのも時節柄富然であつたと思ふ。

本書の譯文は蜷川博士の筆になつたもので勿論間然する所は無い。唯一言し度いのは博士が本書の著者が不明であつたが爲蘭人數氏に訊ねた後古き一蘭人宣教師の著作であることが判明したと言はれてあることで、かゝることは大抵ウエングスタンの附録に載めてあるマアツエを参照すれば明瞭となるのである。即ちマアツエの四三二番に左の如く記してあるのが本書の原本である。

Observations critiques et philosophiques sur le Japon et les Japonais, par l'abbé Lejeune. Amsterdam (Paris) 1780.

東西新史乘

朝鮮役上卷蘇峰學人著

水戸の川口長孺の『征韓偉略』は纏まつた其史であるが天保三年の出版である。木下真弘の『豐太閣征外新史』池内文學博士の『文祿慶長の役』は一は明治年間他は大正時代の好著であるが共に未完の書である。して見れば何ともしも蘇峰學人の『朝鮮役』は一般國民の讀物として歓迎せらる可きである。この上巻は小西行長の平壤打入り、李舜臣の閑山洋の勝利までを叙したもので健筆の蘇峰學人が是を起稿したのは大正九年の九月一日で十二月六日に脱稿したることであるが、材料の蒐集には十分苦心を費して居る。その詳細は本書巻頭の『朝鮮役刊行に就て』の一文が之を十分に明にしてゐる。自分は大正十年度に刊行された史籍のうちこの書が首要な地位を占むることを否むもので無い。

さり乍ら朝鮮役は兎に角日本史上の重要な事件である、隨てその重要な史料も未だ悉く世に公にされたとは云ひ難い。例へば本書の一四五頁に『宗氏と秀吉との關係は秀吉西征の時から始つた。惟ふに彼が宗氏に向つて朝鮮國王入朝の事を申し遣したるは島津氏降服後間も無きことであつたらう』と云ふてある。秀吉の西征は天正十五年のことである。然るに茲に一つの文書がある。

卯月二日書狀今月十一日到來加披見候仍爲音信虎皮拾枚並豹皮

十枚進上悅入候就中於日本地者東目下迄悉治掌天下靜謐候條筑紫乍見物可被成動座候其刻高麗國へ被遣御人數成次第可被仰付候間其砌忠節可被申上候依其動國郡等某仁爲褒美可被下候之條可遂勳功儀尤被思召候猶利休居士可申候也

六月十六日 花押(秀吉)

宗讚岐守とのへ

宗讚岐守とは義調である、この文書は斐紙に認められ且懸紙は捨封で表には宗讚岐守どのへとあり裏には單に秀吉とのみ記してある。この文書の形式上から見ても又筑紫乍見物可被成御動座である内容上から見ても天正十四年の文書と認む可きである。して見れば義調が始めて博多で秀吉に謁したのは本書にも云へる如く天正十五年の六月七日であるが宗家は天正十四年に既に秀吉に歸服して居つて而して秀吉から朝鮮出征のことを豫報されて居つたのである。

以上二項(田中萃一耶)

木崎愛吉氏編の大日本金石史 全三卷 附圖一函

曾て大阪朝日新聞に筆を執られ、攝河泉金石史日本金石彙等の編ある好尙木崎愛吉氏は、過去十年間、各地に散在する金石文を探索し、博く其拓本を集め、其數既に一千内外に達するこの事であるが、今回其れに一一詳細な考證、解釋を附し、上代より慶長

迄のもの、約九百種を全三卷一千五百餘頁におさめ、且つ別に、金石文拓本石すり、及實物寫眞菊倍版、コロタイプ百枚(一函)を附して公にせられた。

これ迄、我國の金石文を集めたものは、少くないがそれは、たゞ一時代、一地方、或は一文にとゞまつて居る、しかし、同氏の金石史には、今日迄發見せられた慶長迄の金石文の大部分は、おさめ盡されてあるので、學界に貢獻する所は云ふ迄もなく、且つかく多數の金石文をおさめたものは、おそろしくこれが第一であらう。今其の内容の概要を紹介すれば、

第一卷は大正十年十月五日に發行せられて、其の最初には、「日本金石史一千年以上解説年表」が附せられて、次に總説があつてそれに於て同氏は金石文學を定義して、

「金石文學は、人類の物質的遺物の中、その年代の表出せられたるものに據りて、人類の過去を研究するの學なり、」

と言はれ、「それが考古學の一座を占むるものであることを、明かにして置きたいのである」と

又、「わたくしは、この金石文學を、歴史の補助學科としてよりも、考古學の一分科としてよりも、尙それ以上に、その位置を占有せしむべき程度に、この學科を價值づけたいと思ふのである」と言はれてゐる。

次に、各論に入り、前編に、「飛鳥期より平安前期迄」、即ち一千年以上のもの八十餘種を、後編に、「平安中期より同後期迄」のもの七十餘種をおさめ、